

蝉時雨

上田謙二

今年の夏も燃えるような暑さだ。こういうのを炎暑、酷暑と表現するのだろう。毎日夕方になると汗まみれである。夏がこれほどに暑いということを改めて思い知らされた。新聞によると今年の七月は日本の観測史上最も平均気温が高かったという。冷房がフル稼働である。

その暑さにつられて、わが家の両隣の家の庭から岬時雨が聞こえてくる。私の家がある付近は、家々が雑然と犇めいている街中なのだが両隣の家の庭には樹木が鬱蒼と生い茂っているのだ、蝉の格好の棲処となっている。ジージーと絞り出すように鳴く油蝉が主である。こうしてものを書いていても、私の頭上には最後の生を惜しむかのように鳴き急ぐ油蝉の声が充満している。

テレビの画面にはパリオリンピックと共に高校野球の熱闘が甲子園から届いている。立秋を過ぎたとはいえ夏本番である。昔の私だったら、さしずめ今頃は船に乗って相模湾でワカシ釣りに興じていたろう。だが、このごろは杖もついでるので夏の暑い時期にはどこへも出かける気がしなくなってきた。家でぐるりと横になっているか本を読むことぐらいのことしかない。

暑さで空蟬のように心持ちの充実していないのに私だが、秋になれば又元氣も出てくるだろう。しかし、もともと私は

夏は好きなのである。強烈な太陽の光に照らされると頭の中の病魔が退散して行くような気がする。昔は本当に海にも親しんだ。

騒音は気になるのに蝉時雨は一向に気にならないばかりか、夏らしい風情があると心が落ち着いてくる。あの第二次世界大戦が終わった時も、蝉が鳴きしきっていたと思うと、感慨も一入であるが。

蝉は害虫であるが何年もの長い時間地中に潜っていて、地上で脱皮して成虫となると僅か一週間かそこらで死んでしまう。その姿は人の世の変転も感じさせてそぞろ人生の儂さをそそる。蝉時雨に私は生の儂さと充実、喜びと虚しさ、憧れと挫折など、複雑な人生の襞を想う。真夏の気怠い午後私はそんなことを考えながら、蝉時雨の中に身を置いている。

大地いましづかに揺れよ油蝉 富沢赤黄男

蛍

私が子どものころは、夏になると少し足を運んで町の郊外の田圃にでも出向けば、夕闇の中を右に左に飛び交う蛍が見られた。あの幻想的な美しさは今も目に鮮やかに焼きついている。

蛍を見なくなって久しい。農薬の普及や宅地化でその生殖地が奪われたからだろう。夏の風物詩ともいうべき蛍が見られないのは寂しい。この昆虫は往古より日本人に親しまれてきた。私には谷崎潤一郎の『細雪』の蛍狩りの場面や、宮本輝の『蛍河』などが記憶に印象深く残っている。

子どものころ母の実家の田舎に行ってよく蛍を見た。

「ホッ、ホッ、ホタル来い。あっちの水は苦いぞ、こっちの水は甘いぞ……」

夕方になると歌いながら、夜の川辺の田舎道を歩いたことを思い出す。

今は日本人の生活から夏の風物が徐々に姿を消している。蚊帳や清涼飲料水のラムネなど、生活様式が大きく変わったのだから当然であるが。それと共に日本人の持っていた素朴な感性も消えてしまったのだろう。

この夏は蛍を見たいと思っているのだが、小田原の近く

に蛍の名所があるとは聞いていない。私には追憶の中の生き物なのだろう。

淋しさや音なく起って行く蛍 村上鬼城